

伝統教育における短歌の応用

— 〈歌合〉の導入と試み—

加藤孝男*

1. 短歌教育の意義

伝統を重視する教育への要請がたかまっている。そんななかで、じっさいの教育現場ではどのようにすれば、理想的な教育を行うことができるのか。ここでは、伝統文化を〈学び手〉に理解させるために、短歌を使った教育について考えたい。

短歌は、日本で一千年以上にわたって書かれてきた定型詩である。文学史的な理解の中では、短歌から歌物語が生まれ、さらには王朝の作り物語文学へと発展することで、日本文学の本流が形成された。

現存最古の和歌集といわれる『万葉集』は、令和という元号とともに、注目を浴びたが、そこには短歌以外にも、長歌、旋頭歌、片歌、仏足石歌などの歌体が存在し、それらの総称が和歌なのである。その後、古今和歌集を経て、勅撰和歌集の流れが確立されると、短歌以外のジャンルは衰退して、和歌といえば、短歌をさすようになるのである。この勅撰和歌集の伝統は、他の文芸や芸術ジャンルなどへと影響を与えながら今日へと継承されている。その意味で、和歌（短歌）は日本文学の骨格ともいえる。

ここでいう勅撰和歌集とは、天皇の命令によって編まれた和歌集をさし、国家プロジェクトの一つでもあった。この勅撰和歌集が『古今和歌集』以降、21代にもわたって編纂され続けたことは、和歌が日本文学の表看板であったことを物語っている。

和歌を理解するためには、これまで百人一首などを暗記するという方法が有効とされてきた。むろん、百人一首に選ばれた歌はほとんどが流麗な韻律をもつため、こうした韻律を若い頃に記憶することは、日本の伝統の重要な部分を体得することに他ならない。

しかし、百人一首の大半の歌が難しく、研究者によっても、解釈にばらつきがあることも事実である。むろん、和歌が文学である以上、解釈が異なるということは当然のことなのであるが、意味を明確に教えることが出来ないという弱点がある。

一方で、短歌というジャンルは、現代にも深く根付いており、短歌をつくっている人たちは相当数いる。いわゆる短歌は現代と隔絶したジャンルなどではなく、現代文学の一ジャンルとしてその地位を確立している。

戦後、日本文化への反省から、俳句、短歌が否定された時、その提唱者である桑原武夫は、「第二芸術—現代俳句について—」（「世界」、昭和21・11）のなかで、俳句（のちに短歌も）を教室から閉め出せと言ったが、あれは敗戦直後の特殊な状況においてであった。

いま、教育のなかで伝統文化が重要視されるなか、古典的な世界観を背景にもつ短歌を教育に活用することは有効なことである。しかし、教育の現場において、こうした短詩型文芸が敬遠される傾向にあると聞く^(注)。そうしたことを克服するために、どのようなことができるのかということを考えていかなければならない。

* 東海学園大学人文学部 教授

2. 和歌と短歌の違い

元来、和歌には遊びの要素が大きかった。和歌は、「遊びの文芸」と考えられてきたのである。こうした遊びの要素を学びに取り入れていけば、自ずと〈学び手〉の和歌に対する認識は変化するに違いない。

その前に〈和歌〉と〈短歌〉という呼び名について、大ざっぱに整理しておく。

和歌は倭（やまと）歌ともよばれ、漢詩に対抗するジャンルとして、飛鳥時代に成立している。この間の事情を今日に伝えているのは、『万葉集』であるが、そこには、先にも触れた短歌（57577）以外にも、長歌（57・57・・・577）、旋頭歌（577577）、仏足石歌（575777）などがふくまれている。こうした多様な歌体は、その後の歴史の中で淘汰されて、和歌といえば短歌をさすようになるのである。

しかし、和歌がふたたび、短歌と名称を変えるのは、明治20年代から30年代に興った和歌革新運動によってであった。与謝野鉄幹や正岡子規という新しい明治の詩人たちによって、こうした古い時代の和歌が否定され、新たな時代の和歌（新派和歌）が模索されだした。

彼らの運動は、和歌革新運動と呼ばれたり、稀には短歌革新運動と呼ばれたりもしている。むろん、この二つの言い方は、異なった意味をもっている。和歌革新運動という場合は、短歌の外にも、長歌の革新もふくんでいて、この長歌がのちに新体詩とよばれ、現代詩を生み出す。その和歌革新運動のなかで、とりわけ短歌に限定した場合を、短歌革新と呼ぶ。

57577の古典和歌のもっていた美意識や、用語、技法などが見直されて、つくり手の実感や生活感覚などを、作品に直接反映していく方法が、この時期に試みられている。

春あさき道灌山の一つ茶屋に餅くふ書生袴つけたり	与謝野鉄幹
冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ	正岡子規

鉄幹の歌は、明治31年4月10日の「読売新聞」に、子規の作品は、33年の3月9日の新聞「日本」に掲載されている。現代においては「袴」や「足袋」などとというものは、生活実感に反しているものであるが、この歌が発表された頃、人々にとっては、こうしたものが生活実感を刺激するものであった。

鉄幹の歌が春をうたっているのに対して、子規の歌は、冬をうたっている。両者共に視覚によって捉えられた歌とっていい。鉄幹が浪漫派、子規は写実派というのは大ざっぱな傾向に過ぎない。鉄幹の歌は、道灌山の茶屋で餅を食う学生の袴を、子規の歌は、病気で籠もる自らの家に干された足袋を詠んでいる。こうした歌は、即物的であり、見たままをうたったもので、現代短歌の源流である。

先ほども述べた「小倉百人一首」の歌と比較してみれば、構造の違いが明らかとなる。百人一首の編纂者ともいわれる定家の代表作を次にあげよう。

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ	藤原定家
-----------------------------	------

この歌は、百人一首の代表作のみならず、古典和歌の代表作でもあるが、解釈は複雑だ。

来ない人を待つ、という「待つ」に「松帆の浦」の「松」が掛けられている。これは掛詞の技術で、「松帆の浦」は、淡路島の北端の地名である。この場所で、夕風の時に焼く藻塩（昔の製塩）のように私が身を焦がしながら人を待っているのである。

さらに、このなかには「淡路島 松帆の浦に 朝風に 玉藻刈りつつ 夕風に 藻塩焼きつつ
あまをとめ 海少女・・・」（『万葉集』）という本歌が存在し、本歌取りという技法も使われている。

じつに見事な歌といえるが、解釈は、めぐりめぐって迷宮に入る。すなわち、この定家の歌は、恋人を待っている女の立場で詠まれているのであって、その意味で、男である定家が、女になりかわって詠んで

いるのである。

小説であれば、男の作者が女性の立場で描くことは、ごく自然なことだ。我々は紀貫之が『土佐日記』を女性の立場で書いていることを知っているが、歌人であった貫之は、和歌で使う常套手段を文章に応用したにすぎなかった。和歌は、それくらいに遊び心満載なのである。

鉄幹や子規の単純な歌と比べると、本歌を重層的に作品のなかに折り込みながら、高い教養をみせびらかすように創作している。こうした和歌の世界観を、明治の詩人たちは排除して、実感や見たままを作品化した。それが「袴」や「足袋」の歌であった。

この和歌（短歌）革新運動を経ることで、和歌という呼び名が廃れて、〈短歌〉という呼び名が新たに生まれたのである。

3. 歌合の歴史

今日我々は、57577の形式を短歌と呼ぶが、そのとき、和歌にあった多様な技術（枕詞、序詞、掛詞、縁語など）や重層的な美意識が忘れ去られてしまった。これは複雑な和歌を、分かりやすくもしたが、こうした技術を用いた人たちが拠り所にしてきた「遊び心」が、軽視されだすのである。

いま、和歌の世界へ立ち返ることは不可能といってよい。しかし、古典和歌がもっていた遊び心を復活させることはできよう。こうした遊び心を取り戻すことで、和歌について考える糸口をつくることのできるのである。

そこで有効なのが〈歌合〉だ。歌合とは、左右、2つのグループに分かれて、それぞれが詠んだ短歌を闘わせ、どちらが勝ちかを決める遊びである。

平安・鎌倉時代に多く行われたものである。記録が残っているもので最も古いものに、「民部卿行平歌合」がある。これは886（あるいは887年）ころ、在原行平の家で行った「一二番二十四首」の歌合である（萩谷朴『平安朝歌合大成』1、同朋舎、1979年）。ここにいう「一二番」とは、左右に配置された歌を12回にわたって闘わせたという意味である。

在民部卿歌合は、歌のみが記されて、詳細な記録が残されているわけではない。その方法が記録されるようになるのは、960年、村上天皇の時代の天徳内裏歌合あたりからであろう。女房の日記などの記録などから、歌合がどのように行われたかが明らかとなる。天徳内裏歌合は、天皇臨席の歌合として有名なもので、判詞とよばれる勝ち負けの理由も残されている。

こうした歌合を研究し、平安時代に記録の残るものを全て集めた萩谷朴の『平安朝歌合大成』（全十巻）には、現存する466回の歌合の記録が残されている。

むろん研究者でないかぎり、これらのすべてに目を通し、理解することは困難である。比較的簡便な本として『日本古典文学大系 歌合集』（岩波書店、1965年）が便利であり、古代と中世、両方の歌合の代表的なものを収録し、古代については萩谷朴が、中世については、谷山茂が解説を記している。

こうした記録を読むと、歌合というものが、この時代の和歌を高度に発展させたことが分かる。面白いのは、左右に分かれて競った相撲や競馬くらべうまや賭弓のりゆみなどと同じ土俵に、歌合もあったということである。これは現代の相撲をイメージすると分かりやすい。

こうした歌合を現代に生かしたのが、短歌ならぬ、俳句甲子園であり、これは高校生が俳句によって競い合うことでも有名である。歌合の形式からヒントを得て、ルールが整備されたものである。高校生のグループが左右に分かれて、自ら作った句を披露しながら、仲間の句を褒めて、相手の句の難点を批評するという形式で、批評能力も同時に養われていく。

元来、歌合には、判者という者がいて、歌の勝ち負けを判定する。歌合の場合は、この判者の書いた判詞が後世まで残っていて、文学史的にはその判詞から歌論が生み出されていく。

無論こうした歌合の歴史を語ることは、古典和歌の歴史について語ることでもある。だが、俳句甲子園など例でも分かるように、こうした催しをすることは、あらかじめ大変な準備を必要とする。じっさいに教育の現場を考えたとき、歌合というものに、そこまで時間をさくことはできない。少ない時間で、いかにして歌合というものを理解させるかというところが重要である。そのためにはいくつかの方法がある。その一つの方法として、次のような方法を提起したい。

4. 短歌創作の要点



写真の用例は、学生の詠草（短歌作品）を並べ、印刷したものである。このプリントは、大学の「短歌創作」の時間に使用したものである。このなかから学生が自分の最も好きな歌を選び、それを左右に分かれて板書して、その優劣を競うのである。

このような方法であれば、あらかじめ学生に作品をつくってもらい、集めた詠草を、写真のように貼り付け、印刷機にかけるだけで、歌合の下地が整う。

できることなら、最初の1時間で、教師は生徒（学生）に対して短歌のつくり方を説明し、さらに題を与え、その題に従って短歌を創作させることが望ましい。（つくり方の方法については別稿に譲る）

題は教師が考えてもいいが、生徒から題を提案させるのも1つの方法である。そしてこの題を、板書し、その場でつくらせるか、宿題にして次の時間に提出させるかによって、作品を回収する。時間のある場合には、生徒を外に解放して、短歌の題材を取材させてもよい。短歌のつくりかたの説明をする場合は、あらかじめ「短冊」（写真のような細長の用紙）を生徒に配布しておく、生徒は自分がこれから短歌をつくることを意識し、教員の話の聞くことができる。

ではどのようにして短歌のつくり方を説明したらよいのであろう。理想的には、時間をかけて、短歌のつくり方を説明するのがよいが、時間がなければ、ポイントのみ説明しておくことが大切である。以下、そのポイントをあげる。

1. 近代、現代短歌の用例をいくつか示す。
2. 短歌は、57577の定型詩であることを説明する。
3. 字余りを許容する。

といった3点を確認しておく。ここで短歌と俳句の違いについても触れ、文学史的な経緯を説く時間があれば、2つのジャンルの歴史なども説明することができるだろう。(ない場合は、こうした説明は省く)。ただ、もっとも大切なことは、短歌をつくる場合には、俳句に必要とされている〈季語〉(季題ともいう)を、使わなくても使ってもどちらでもいい。短歌は、俳句と違い季節感に左右されず、感じたままを描くことができる文芸だからである。

さて、短歌を創作するのは、提出用の短冊ではなく、まず自分のノートに下書きをさせ、推敲の過程を明確にさせるのがよい(ノートに書いてあると自身の手控えにもなる)。そして、1首提出するとき、5首くらいかかせると、いい作品ができるものである。

さらに〈短冊〉についても、説明したい。A4の用紙を1～2センチほどに切った用紙を、仮に短冊と呼ぶが、毛筆用の短冊が別にあることも説明しておきたい。

そして、そこにボールペンで、はっきりと歌を書くようにし、短冊のうらがわに、氏名をかならず書くようにする。なぜボールペンかと言うと、これは印刷した時、鉛筆だと文字がはっきりと写らないからである。

短歌には、思いついたことを自由に書く自由題と、あらかじめ題が与えられる題詠とがある。題詠は、たとえば「緑」という言葉が与えられたとき、「緑」ということばを使ってもいいし、緑ということばをイメージするような歌をつくってもいい。

そして、創作方法は、さきほども記したように、一首の歌を長時間考えるよりも、思いつくままに多くの作品をつくることを心がけた方が、いい作品ができやすい。これも明治期に正岡子規の自宅で行った「線香会」といわれるものが参考となる。線香が一本燃え尽きるあいだに、出来るだけ多くの歌をつくるという会であった。手早く多く作る方法は、一首をじっくり考える方法に優るのである。

さて、いよいよ、教師はその短冊を集めて、写真のように、裏(上方のみ)を糊で貼り付けて、印刷し、生徒に配布する。このような方法を取れば教員が予めパソコンなどで、生徒の作品を打って準備する必要はなくなる。名前は裏に書いてあるので誰の作品かも分かる。

印刷物を手にした生徒には誰の作品か分からないため、安心して批評することができる。作品を配布し終わったら、作品を1首ずつ、できれば2回繰り返して、生徒、または教師が読み上げる。

学生に読ませた場合も、最終的に教師が読み上げ、その読み方を確定しておきたい。歌は究極的なところ調べであるといわれていて、短歌は韻律が重要であるということも、ここで教えなければならない。間違った読みをすると、作品の魅力が半減してしまう。

読み上げる前に、学生に自分の心に触れた歌に、すべてチェックを入れるように伝えておく。あとで、そのなかから最もよいものを1首選ぶようにすることが大切である。

5. 歌合の実践

いよいよ歌合である。教員は学生2人を指名して、黒板の左右を使って、一方が左、一方が右に、生徒自身ももっとも気に入った作品を板書させる。(むろん、自分の作品がもっともよいと考える場合は、自分の作品でもよい)。

右と左に短歌が板書された時期をみはからって、教員は左右それぞれの生徒にその歌を読み上げさせて、その歌のどこが良かったかを簡単に解説させる。

その後、教員が左右平等にコメントを述べることもできる。さらに、生徒に左右どちらが好きかを判定させる。この場合、多数決で多い方を勝ちとする。同点数の引き分けの場合は「持（じ）」ということになる。こうした古いい方も積極的に使いたい。

むろん、教員が判者（判定をする人）となって、教員の見解を述べてもいい。多く点数が入った方が、かならずしも優れた歌とは限らないこともあらかじめ話しておく。この方法で行えば前で板書した生徒は、自らの歌ではないので、負けてもさほど落胆することもなく、取り上げられた生徒も、内心誇りに思うかもしれない。

さらに勝負が決した後、勝った側に1票を投じた生徒に、その理由を述べさせることで、教育的な効果を上げることができよう。同じように負けた歌に入れた生徒にも理由を述べさせ、負けた歌の良さについても強調することを忘れてはならない。

このような歌合を、時間がくるまで続けていく。そうすることで、学生はハラハラしながら歌の批評にも習熟し、創作意欲をたかめることができる。こうした指導法によって、短歌というものに親しみをもたせ、創作する喜びを知ることで、和歌というものを、より身近に感じるようになる。

(注)「新学習指導要領」「文学国語」A「書くこと」(2)のアに、「自由に発想したり評論を参考にしたりして、小説や詩歌などを創作し、批評し合う活動」などの項目がある。